

「吾輩」と「多崎つくる」

Junko Higasa 2016.4.3

夏目漱石作『吾輩は猫である』を読みながら、ふと村上春樹作『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』を思い浮かべた。

友人 5 人グループのうち、多崎つくるだけが名字に色を表す文字がない。そして色を表す名字を持つ 4 人のうちシロは亡くなったが、残る 3 人のうち、アオは自動車販売会社の有能社員、アカは女性誌で紹介されるベンチャー企業の社長、クロは陶芸作品を作る藝術家、多崎つくるは生活向上に欠かせない鉄道駅の設計者。

『猫』では、車屋の家の黒、軍人の家にいる白、二絃琴の師匠に愛される三毛。吾輩だけが毛色を表す名を持たない。そして車屋の人力車はのちに自動車に替わり、軍人の手柄は新聞で紹介され、二絃琴の音楽はいわゆる藝術分野、教師は人間向上に欠かせない教育者。

双方「車」「マスメディア」「藝術」「地味だけれども世の中に必要なもの」という共通項がある。

そして村上作品に「6 本指」の話があるが、連想するのは「ヘミングウェイの猫」である。

人間の指は手足ともに 5 本。猫の指は前足 5 本、後足 4 本ながら、前足親指の肉球は小さいので表面的には 4 本に見える。5 本コロニーの中で異質な多崎つくと、4 本コロニーの中で異質な吾輩の持つ混沌とした色彩は、世の中のカオスではなかろうか。